

新刊 Book reviews

□日本植物分類学会国際命名規約邦訳委員会(訳・編集): **国際藻類・菌類・植物命名規約(メルボルン規約) 2012 日本語版** B5. 233 pp. 2014. 北隆館. ¥2,593+ 税. ISBN 978-4-8326-0984-6.

2011年にメルボルンで開かれた国際植物学会議の命名法部会で、従来の「国際植物命名規約」という名称が、表記のように変更され、この規約の適用範囲が緑色植物のみを対象とするものではないことを明示することになった。この他の生物群としては、動物と細菌が、それぞれ独立のものとして扱われている。また最近の電子出版の隆盛に対応するために、多くの項目が盛り込まれている。

日本植物分類学会は、大橋広好氏、永益英敏氏、邑田 仁氏を代表とする13名のメルボルン規約邦訳委員会の努力で、このほど刊行の運びとなった。学名の発表がラテン語に限らず、英語でも行えるようになり、また、電子著作物による発表も認められるようになったため、誰でも容易に新学名の発表ができるようになった、と思う人がいるかも知れないが、その代わり発表は、以前にも増して自己責任となるので、手をつける前に本書を購入・熟読し、慎重に行動してもらいたい。

かつては「秘伝」だった植物命名規約が、大橋氏をはじめとする邦訳委員会の努力で、広く理解されるようになることを期待する。なお、保存名、廃棄名、学名不採用図書、記載文・判別文の判断基準、類似する綴りをもつ形容語の判別基準などを含む付則II-VIIIは、後日印刷物と電子出版で刊行の予定である。面倒な翻訳と解釈に努めておられる委員各位に敬意を表する。

(金井弘夫 H. KANAI)

□千葉県立中央博物館(監)、斎木健一、土屋健: **図鑑大好き!** B5. 111 pp. 2014. 彩流社. ¥2,000+ 税. ISBN 978-4-7791-2011-4.

千葉県立中央博物館の特別展の解説図録。プロローグ:古書・希少書ライブラリー、エピローグ:図鑑をつくろう...を挟んで、思い出の一冊、図鑑を作る人々、日本図鑑史、使える図鑑、の4部より成る。動物関係のものが多くのは自然の成り行きで、特に虫や鳥関係では、クモの巣や鳴き声の図鑑もある。貝が無いと思ったら、僅かに触

れられていた。こういう小冊子で、なにもかも万遍なく...とは行かないので、やむを得ない。植物では、大場達之氏の神奈川県・千葉県での、市民を動員した植物図鑑づくりの構想が披露されている。石戸 忠氏の「学習コンピューター植物図鑑」や、大川ち津る氏の「植物の特徴を見分ける本」も紹介されている。

へり孔パンチカードの「図鑑」は見たことはない、と書いてあるが、世代の差を感じさせる。図鑑として存在したことがあるかどうか知らないが、へり孔パンチカードは、IBMカードと並んで、一頃は情報整理の立役者で、図書や標本の整理によく用いられたし、アパーチャーカードとして、写真ネガの整理保存に多用されていた。しかしパソコンの普及と表計算ソフトや画像処理機能の発達で、現在では忘れられてしまった。図鑑とは言えないかもしれないが、マイクロフィッシュも、もはや前世紀の遺物である。大川氏の植物同定カードも、初めは形質がへり孔式だったのだが、形質数と種類数の増加に伴って収容し切れなくなり、形質カードに種類名を中抜きパンチで入れるようになったのである。

日本全国33博物館100人の学芸員に聞いたオススメ図鑑では、初心者～中級者向けのものとして、植物では山溪ハンディ図鑑が挙げられている。その理由の一つとして、園芸家の柳生真吾氏は、「本書は収容種類数が多く、厚ぼったくて持ち歩くには不便だが、どの頁でも平らに開いて置ける」という点を挙げている。辞書的に使う頁数の多い書物が「開いておけない」ことについて、私もときどき文句を付けてきたので、「なるほど」と思った。一方、学芸員が愛用する図鑑としては、平凡社の日本の野生植物が挙げられている。最後の図書一覧には約60件の図鑑類やネット図鑑類がリストされている。(金井弘夫 H. KANAI)

□柴岡弘郎: **植物は形を変える** B5. 154 pp. 2003. 共立出版. ¥2,300+ 税. ISBN 4-320-05603-5.

植物生理の本は有機化学みたいで、私には取りつきにくいものだった。本書では、まず「植物の茎はなぜ長いのか?」という、あたり前の事象についての疑問が提示される。植物は細胞からできているので、その細胞の形が長いこと、そうなるために、細胞の中でどんな微小器官がどんなホルモンの影響下でどんな位置に配置され、細胞相互間にどんな連携があるのかが略説される。

本文は6章より成り、1.細胞骨格、2.植物ホルモン、3.細胞分裂の分裂面制御、4.細胞伸長と伸長方向の制御、5.細胞壁修飾を含む細胞分化、6.環境要因による形の制御、である。どの章も「はじめに」に始まり、「まとめ」で終わり、参考書と引用文献が示されている。2章に構造式と生合成経路がたくさん出てくる以外は、それぞれの具体的トピックに関する説明で、とくに微小管の配置と細胞壁形成や核分裂との関係が、分かり易く図解説明されている。

表皮細胞の細胞壁は、出来たばかりのときは真っ直ぐなのだが、既に隣同士の細胞壁を挟んで、微小管の束が交互に配置されていて、それに従って、壁が波形に作られてゆき、われわれが見慣れた形になる。収縮根の形成と、それが地表近くでしか起らない理由とか、接触刺激に対する巻き鬚運動に、二通りのタイプがあることなど、観察会的话题を仕込むことができる。植物生理の本はわからないものと敬遠していたが、本書は末尾の索引で現象名を探せば、それぞれ有益な知識を供給してくれる。10年ほど昔の本だが、おすすめする。

(金井弘夫 H. KANAI)

□湯澤陽一：いわき植物誌。A4. 608 pp. 2014. ¥5,000+ 税。歴史春秋出版。ISBN 978-4-89757-836-1.

608 ページにおよぶ厚手で本格的な植物誌である。本書は維管束植物だけでなく、コケ植物も扱っている。タイトルのいわきとは旧国名の磐城国を指し、福島県の太平洋側ほぼ半分の地域を対象としている。この一帯は、多くの暖帯要素の北限となっているいわき市や、日本海要素が遺存的に分布している阿武隈山地を含んでいる、植物地理学的に興味深い地域である。また、基本的に標本を確認した植物や証拠標本を伴った文献で報告された植物のみを掲載し、後半の植物リストには証拠標本の引用があり、そのほとんどに標本室名が付されている。そのため、研究者の再検討が可能で、科学性が担保されている。本書は地域の植物研究に携わる者のみならず、日本の植物相や植物地理学の研究者にも貴重な情報源となるであろう。著者は常々、地域の植物研究報告や植物誌も科学性を担保すべきであることを説き、地元の研究会誌や同好会誌の論文でも標本引用にこだわってきた。本書でもそのような姿勢が貫かれている。

植物研究史から始まり、化石や花粉分析の知見

に基づく古植生に関する章、著者らが携わった植生調査結果などに基づく現在の植生に関する章が続く。大部分を占めるのはエングラ体系に従って科ごとに主な種類を解説した植物概説と、標本引用を伴った植物目録である。植物概説は主に形態や生育状況が記されているが、カラー写真や線画を多用し、時に分布図が付され、天然記念物や銘木などの植物文化にも触れている。コケ類も含めた植物誌である点も含め、とても一個人の著作とは思えない広領域に渡る深い知識が含まれている。これらは、著者の研究者としての歩みと関連があると思われる。福島県で高校の教員を続けながら広島大学大学院理学研究科に通って、苔類のヤスデゴケ科ヤスデゴケ属の分類学的研究を行い、コナンテリア亜属のモノグラフをまとめると共に、5 種の新種、1 亜種と5 列の属内分類群を記載し、理学博士の学位を得ている。一方で、1987 年に出版された『福島県植物誌』の編さんに中心に関わったほか、『フロラ福島』誌の編集を行うなど、地域の植物相の解明に大きく貢献してきた。また、地元の市誌と町誌も手がけ、地域の植物文化に関する知識の集積にも携わってきた。本書の章立ては、2005 年に出版された『原町市史』で著者らが確立したものである。

本書は、標本の寄贈先リストを作成する中で、地域の植物リスト作り、さらには植物誌作りと構想が発展したものとのことである。著者があとがきで記しているように、私的な標本目録として終わらせず、解説を加えて植物誌とすることにより、地域の植物研究の発展や後継者の育成に大きく寄与することになる。これからの植物誌作りの一つのモデルとなるであろう。これだけの大著なので致し方ないであろうが、本書には写真の上下違いや誤植が散見される。また、近年著者らが積極的に取り組み、学会誌や地方の研究会誌で発表してきた2011年の東日本大震災後の植生や植物相の変化の記述もあまり含まれていない。著者のご健康に支障のない範囲で、改訂版や増補版の出版を望みたい。

いわき市など地元の書店では、本書が並んでいるとのことである。このような、植物のリストや標本の情報が大きな部分を占める本格的な植物誌が出版社から市販される例はあまりないと思われる。一般の人にも目にする機会があることにより、地域の文化に与える影響も大きいであろう。出版社にも拍手を送りたい。出版社は福島県内の植物

関係の本も多く手がけているが、これらは県外では一般に入手しにくいものであるので、連絡先を以下に記す：〒965-0842 福島県会津若松市門田町中野 歴史春秋出版 Tel. 0242-26-6567

(福島大学 黒沢高秀 T. KUROSAWA)

□奥田 實：野菜美 *Beauty in Vegetables* A4. 175 pp. 新樹社. 2014. ¥3,600+ 税. ISBN 978-4-7875-8639-1.

前作の『生命樹』に続く二作目である。一言でいうと、野菜を食物としてではなく、植物として捉えた当世風の写真図鑑である。被写体は、大雪山の麓に居を構える著者の菜園で栽培された野菜たち。本書は、根や花などのパーツ画像をモニター上で切り抜き、それらを一枚の画面に並べる、コラージュという手法で作られている。簡単に「切り抜く」と表現したが、例えばニンジンの複葉やトウモロコシのヒゲなどの場合には気の遠くなるような作業だろう。こうしてできたそれぞれのパーツはまるで水彩画のような軟らかい出来栄えとなっていて、見ていて目に優しい。それでいてディテールがよく表現されている。写真のもつ強みが活かされているといえよう。

全体を「春の菜園」, 「夏の菜園」, 「秋の菜園」, 「冬の菜園」, そして「実り豊かな果樹」と5つのパートに分けて紹介している。各「菜園」ごとに代表的な野菜を取り上げ、それぞれに4ページ(ものによっては2ページ)を割り当て、野菜の姿を描いている。掲載されている野菜は全部で45種。冒頭に図鑑の一種と本書を紹介したが、この取り上げられている種数から、著者が野菜の区別を目的にした訳ではないことは一目瞭然である。

「はじめに」にあるように、著者の意図は野菜

のもつ「植物本来の秘められた野生」を表現するところにあったという。そのためにも地下部の描写は必須だろう。フキやミョウガの地下茎やルバーブやゴボウの塊根などの画像は圧倒的ですからある。しかし、これは菜園で栽培された野菜であって始めて可能となったことである。評者は日本の野生植物でこのような図鑑が欲しいとは思いますが、単純に考えても地下部の洗浄など野外では極めて困難であり、実現は難しいだろう。「おわりに」には撮影に工夫を重ねたと簡単に書かれているのだが、実際に撮影の様子など拝見したいものだ。「企業秘密」が満載かもしれない。

ページを繰っていくといろいろと驚きがある。例えば、アスパラガスの雄花には二型あるとか、レタスの花が開花から2時間もすれば萎んでしまふとか。シソの花や分果など、小さな花や果実の拡大画像が見ていて楽しい。デジタルの世界では拡大・縮小が容易であることが強みになっている。一方、拡大した場合は原寸の表記もしっかり書かれている。

最後に一言。各コラージュの右隅に描かれた野菜の英語表記がある。これはデザイン的に置かれたものと思われるが、非日本語圏の人たちにとってはこれが植物を知る手懸りになりうる。ところが、例えば、ミョウガやダイコンをそれぞれ「Myoga」や「Daikon」としても理解は困難だろう。ここはやはり学名を表記した方が良かったのではないかと思う。ないものねだりだが、海外から渡来した野菜については本来の自生状態が分かるような写真があったら、と思う。

本書は野菜の野生に触れたい方々にお薦めしたい一冊である。(門田裕一 Y. KADOTA)